

## 「知的障害特別支援学校における教育課程の編成と評価の一体化」

### I. 全校研究

#### 1. 研究主題について

令和元年度から3年間取り組んできた「知的障害教育におけるカリキュラム・マネジメントの運用とキャリア教育の推進」の研究を終えた。前研究主題では、カリキュラム・マネジメントを運用する中で、どのように教育課程を改善し、本校の児童生徒のキャリア発達を促進していくかを検討した。この研究を通して、キャリアマトリックス表を作成するとともに、カリキュラム・マネジメントを進めるにあたって有用だったことと、キャリア教育を進めるにあたって有用だったことを整理した。そして、カリキュラム・マネジメントを行った上での評価、特に教科ごとの年間指導計画の評価に関して、どのような方法で行っていくかが課題として挙げられた。その内容は、昨年度の研究大会と研究紀要で発信した。

文部科学省中央教育審議会（2019）は、子供たちの学習の成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、子供たち自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには、学習評価の在り方が極めて重要として、その意義に言及している。学習評価については、子供の学びの評価にとどまらず、「カリキュラム・マネジメント」の中で、教育課程や学習・指導方法の評価と結び付け、子供たちの学びに関わる学習評価の改善を、さらに教育課程や学習・指導の改善に発展・展開させ、授業改善及び組織運営の改善に向けた学校教育全体のサイクルに組み込んでいくことが必要とし、学習評価に関わる取組をカリキュラム・マネジメントに位置付けることの必要性に言及している（図1）。

評価の課題と併せて、本校の知的障害のある児童生徒が、本校在籍時から本校卒業後においても地域社会の一員として自立と社会参加をする力を身に付けるために、どのような習得段階があり、各段階での個別最適な学びがあるかの検討が挙げられた。この内容は、本校の学校教育目標の「自立、社会参加に向けて、一人ひとりの可能性を最大限に引き出す。キャリア教育の視点に立って、卒業後の社会で生きる力を身につける。」にも通じている。文部科学省中央教育審議会（2021）は、「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり、この「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」であると述べている。こうした個別最適な学びを実現に向けた教育課程、年間指導計画の編成、学習・指導方法の提案が求められるとともに、それらの評価を検討していく必要がある。

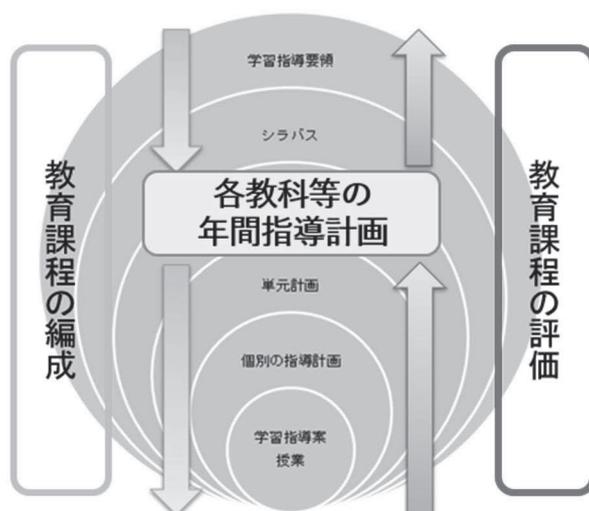


図1 教育課程の編成と評価の一体化（本校研究大会1年次発表資料抜粋）

教育課程編成時、特に年間指導計画の編成にあたっては、まず教科ごとのシラバス（学習系統表）が必要であり、学年等の児童生徒の実態に合わせて、シラバスのどの内容を年間指導計画に取り入れていくかを検討する必要がある。その上で「学習の個性化」の実現には、児童生徒の実態に合った教科ごとの段階を踏まえ、それに応じた単元・題材設定、「指導の個別化」の実現には、個別の指導計画に基づく授業ごとの個に応じた指導や支援の検討が必要である。これらを受けて、1年次は授業の見直しに基づく年間指導計画の基礎作り、2年次は個別最適な学びの実践に向けた年間指導計画の評価の視点づくり、3年次は個別最適な学びを実現する年間指導計画の再構築を実施し、学習指導要領に則る個別最適な学びの実現につなげていく。具体的には、1年次は学習指導案の見直しとシラバスの作成、2年次はシラバスを基にした年間指導計画の作成と年間指導計画の評価とシラバスの作成、3年次は単元ごとの学習指導案作成とシラバスの見直しと年間指導計画の改訂を行う（図2）。

以上より、令和4年度から令和6年度における本校の研究は、個別最適な学びの実現に向けて、知的障害特別支援学校における教育課程の編成と評価の一体化について検討し実践する（図3～図5）。

本校研究主題(令和4年度～6年度)  
「知的障害特別支援学校における教育課程の編成と評価の一体化」

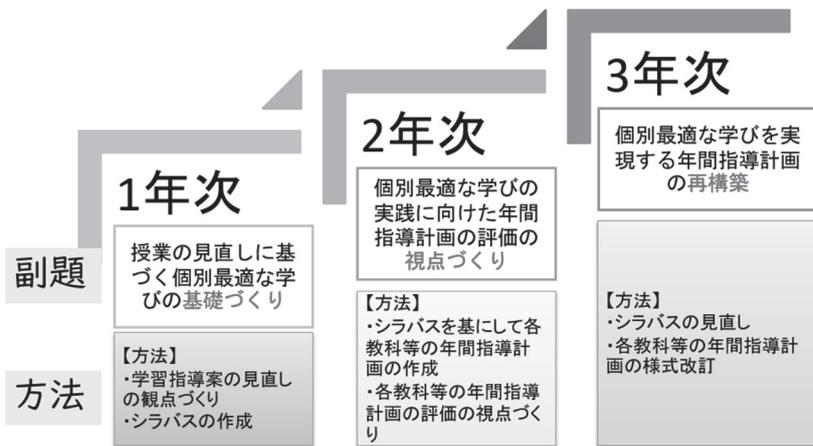


図2 全校研究の副題と方法（本校研究大会1年次発表資料抜粋）

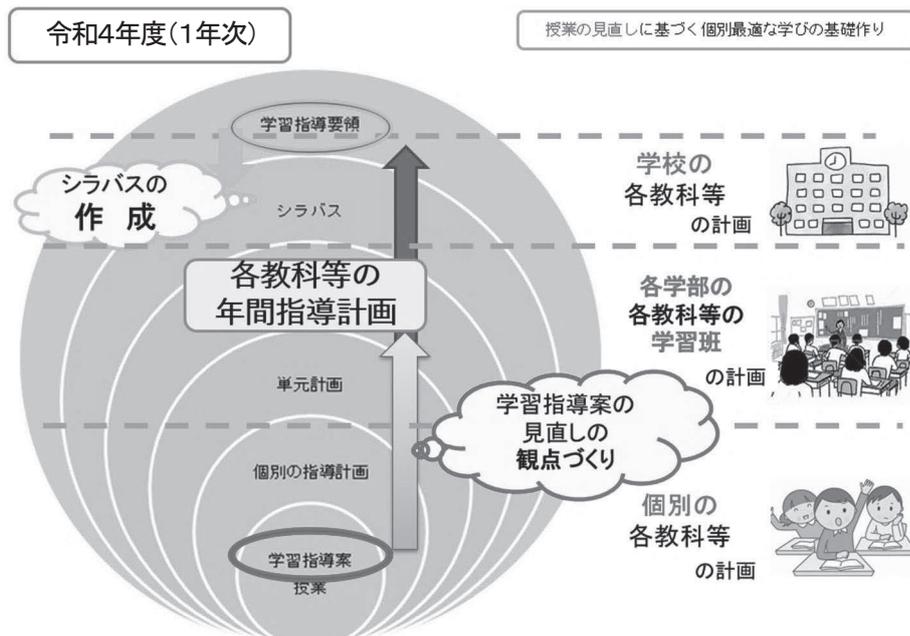


図3 全校研究1年次の計画（本校研究大会1年次発表資料抜粋）

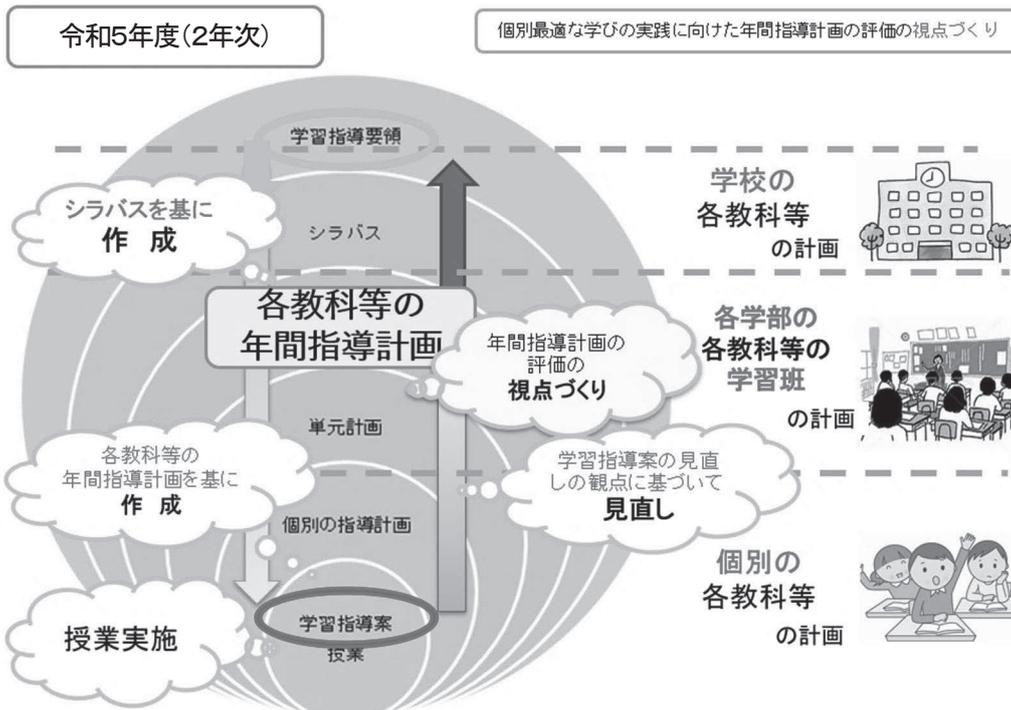


図4 全校研究2年次の計画（本校研究大会1年次発表資料抜粋）

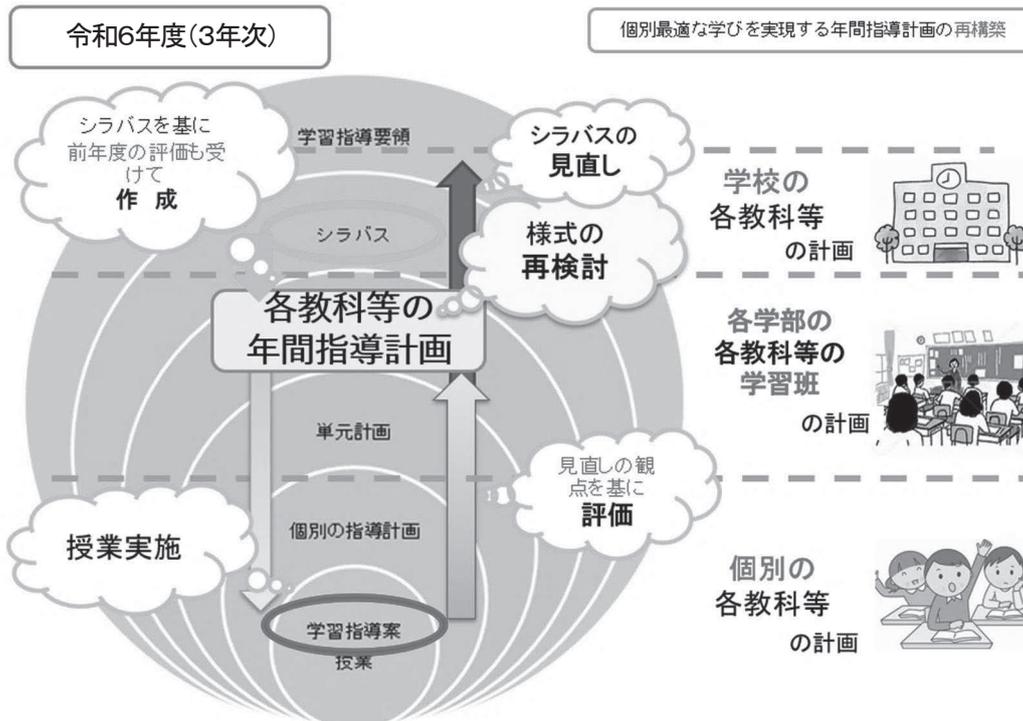


図5 全校研究3年次の計画（本校研究大会1年次発表資料抜粋）

## 2. 今年度の研究報告

今年度は、(1)「教育課程」の現状共有と「教育課程の位置づけ」の確認 (2) 授業の見直し (3) シラバスの作成の意義と「シラバスの位置づけ」の確認 (4) 学習指導案の見直しの観点表の検討 (5) 各教科等のシラバスの検討に取り組んだ。

### (1)「教育課程」の現状共有と「教育課程の位置づけ」の確認

研究主題にある「教育課程」の理解の現状について各学部で話し合った。その話し合いで、教員ごとに理

解の仕方に違いがあることがわかった。(図6) また、教育課程についての疑問点も出てきた。その疑問点も含めて指導助言者の本学特別支援教育部門の今枝史雄先生に研修をしていただき、各学部でまとめるとともに「教育課程の位置づけ」について全教員で確認した。(図7)

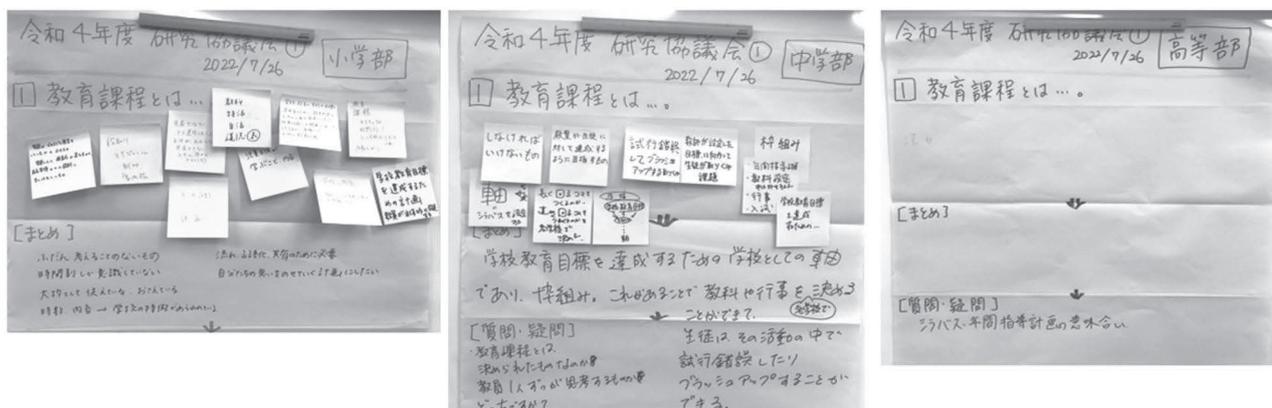


図6 教育課程についての話し合いの内容（小学部・中学部・高等部）

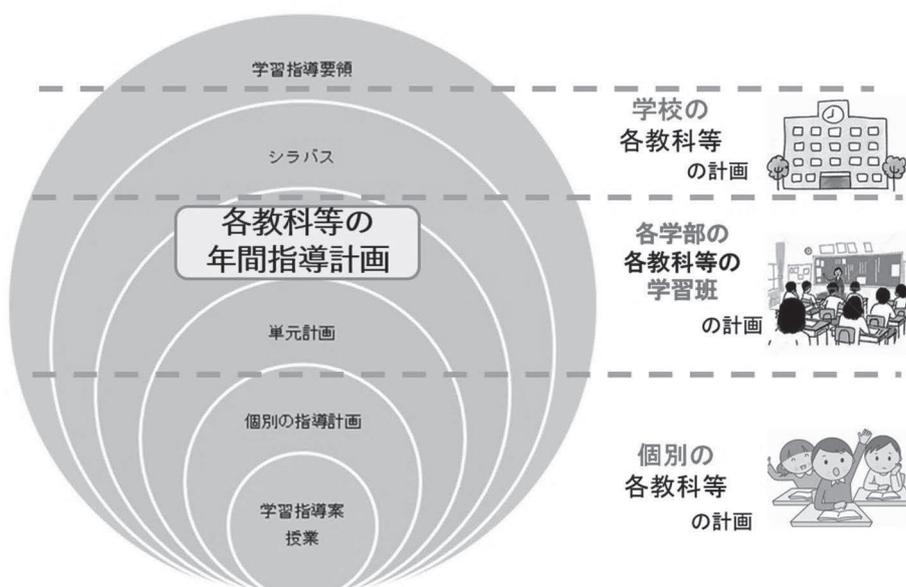


図7 教育課程の位置づけ（本校研究大会1年次発表資料抜粋）

## （2）「授業の見直し」から研究を始める

図7にもあるように「授業」は学習指導要領から始まり、シラバス、各教科等の年間指導計画などを経ながら内容が吟味され、最終的に児童生徒に届けられる学習の時間である。そのため、学習指導案には授業づくりの観点が見詰まっている。

しかしながら、本校では、校内用の学習指導案の様式はあるものの、各教員が使いやすいように形を変えて活用していたこと、また、学習指導案の各項目の理解についても全教員で統一されていなかったことから、教育実習生への学習指導案の指導内容が異なっているという課題があった。さらに、昨年度の研究大会で明らかになった学習指導案に評価規準の項目がないという課題もあり、改めて学習指導案の様式と書き方について検討する必要が出ていた。

そこで、本学特別支援教育部門の今枝史雄先生に学習指導案の書き方についての研修をお願いすることにした。講義していただいたことを参考にして、従来から使用していた学習指導案の様式を一部改訂した。そして、実習委員会で書き方例（別紙1）を作成し全教員に共有した。しかし、書き方例を見るだけでは十分理解できたとはいえないと考え、全教員が担当教科の学習指導案を書くことにした。実際に書くことで、具

体的な疑問点等が出てくるのが予想されたので、再度、今枝先生に添削も含めた講習を行っていただいた。このようにして出てきた具体的な疑問や添削していただいた部分が「授業の見直しの観点」であると考え、ここを研究の出発点とした（図8）。

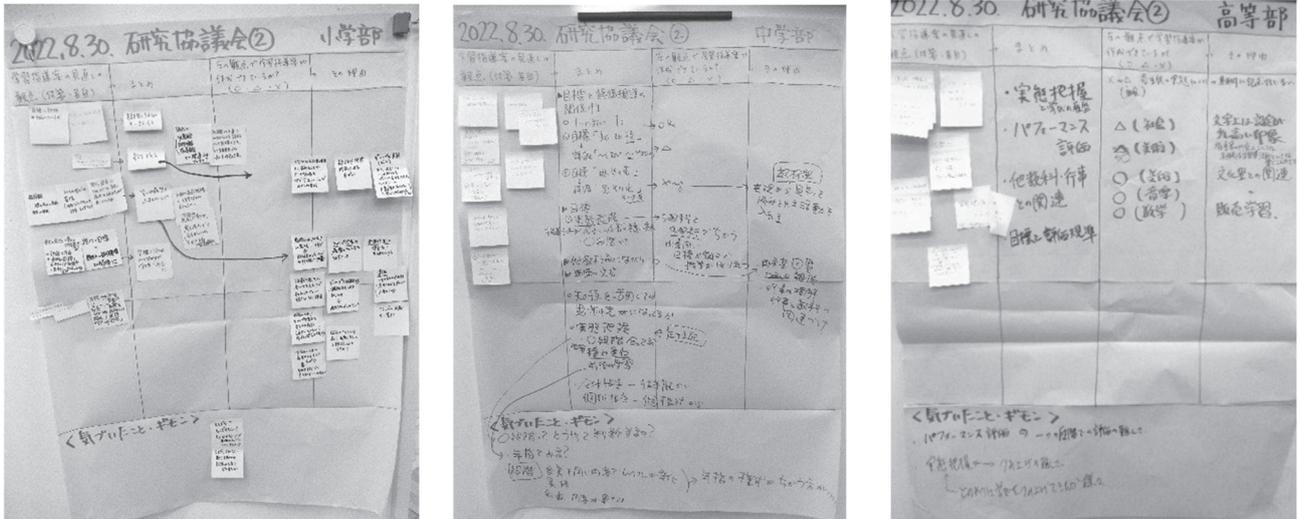


図8 学部検討「授業（学習指導案）の見直しの観点」

### （3）「シラバス作成の意義」と「シラバスの位置づけ」の確認

学部検討「授業（学習指導案）の見直しの観点」の中で、主に3点の課題が各学部共通して挙げられた。1つ目は、「児童生徒の学習の積み上げをどのように記録するか」という課題。2つ目は、「児童生徒の各教科等の段階（国語科小学部2段階等）をどのように判断するか」という課題。3つ目は、「各教科の能力に差がある児童生徒が同じグループで学習するときの授業目標の設定や題材選びの難しさ」という課題である。

それらの課題を解決していくためには、学習の積み上げを学校単位、学習班単位、個別単位といった段階をつけて計画し、実施、評価、記録をしていく必要があることや、学校単位での系統的な学習計画表であるシラバス、学部単位や学習班単位での各教科等の年間指導計画や単元計画、これらを基に個別の指導計画や日々の学習指導案があることで、学習の積み上げの記録が可能になることに気づいた（図9）。

また、シラバスを作成する過程で、各教科等の段階の違いについて教員が把握することで、児童生徒の各教科等の段階を客観的に判断できることにも気づき、シラバスを作成する意義が明確になった。

そこで、改めて「シラバス」は、本校版の各教科等の系統性のある学習指導計画で評価規準を含むものであることを全教員で確認した（図10）。

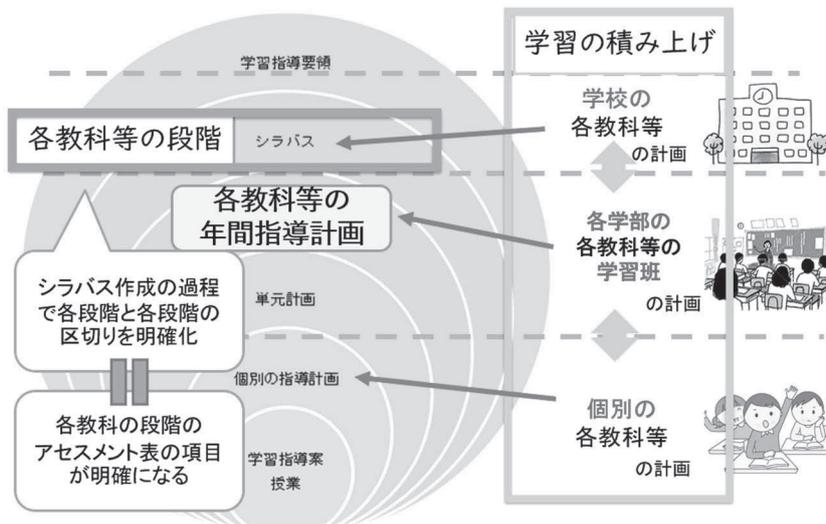


図9 「シラバス」を作成する意義（本校研究大会1年次発表資料抜粋）

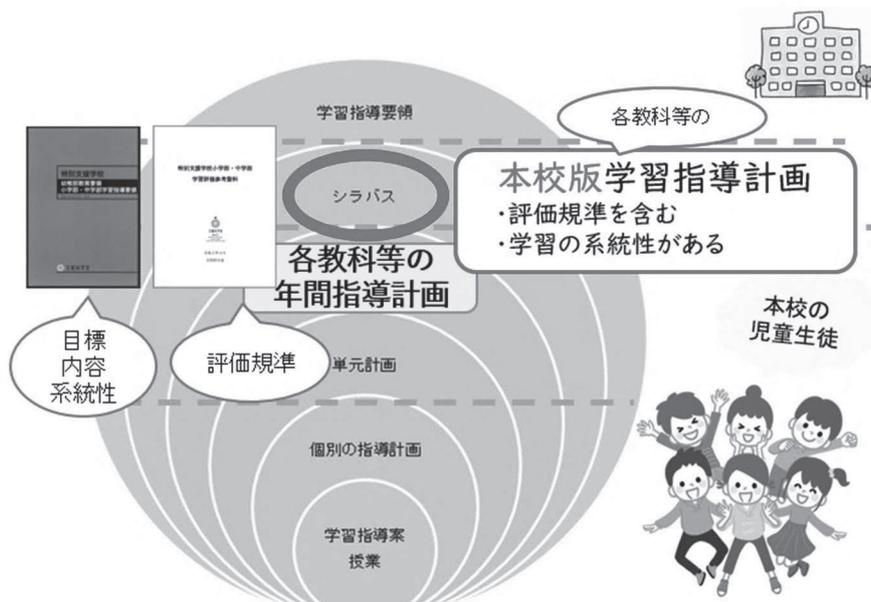


図10 シラバスの位置づけ（本校研究大会1年次発表資料抜粋）

#### （4）学習指導案の見直しの観点表の検討

学部検討での「学習指導案の見直しの観点」のまとめを基に、学習指導案の見直しの観点表の作成に着手した。各学部でまとめた内容と「学習指導案の見直しの観点」の研修資料を合わせて、「学習指導案の見直しの観点表（仮）」を作成した（表2）。「学習指導案の見直しの観点表」は、学習指導案の項目ごとにチェック項目を検討した（写真1）。

今後は、この表で学習指導案をチェックしながら、チェック項目と学習指導案の改善を行い、授業作りの大切な観点を教員が常に振り返り、児童生徒にとって個別最適な学びができる授業作りにつなげていきたい。

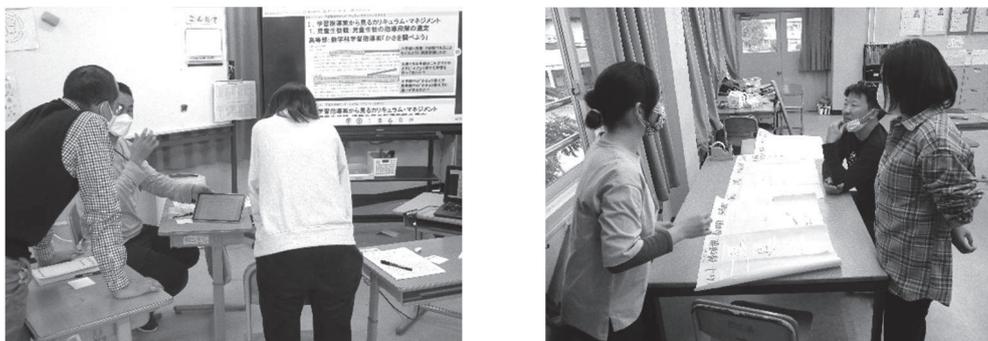


写真1 「学習指導案の見直しの観点表」検討の様子

#### （5）各教科等のシラバスの検討

学部検討「学習指導案の見直しの観点」の中で挙げた3つ目の課題点として「各教科の能力差がある児童生徒が同じ学習をする時の授業目標の設定や題材選びの難しさ」がある。その主な理由として、段階ごとに内容が変わる教科があること、また、本校の小学部が1・2年生、3・4年生、5・6年生の複式学級であり、中学部と高等部は1年生から3年生の縦割りで学習班を編成していることがある。そこで、特に、授業目標の設定や題材選びに困難さを感じている国語、算数・数学、社会、理科の4教科と、社会と理科につながる生活、小学部・中学部・高等部ともに学部全体で授業を行っている体育・保健体育の6教科からシラバスの検討を行うことにした。

シラバスの検討は、学習指導要領とその解説を基に、「知識・技能」の目標を本校版に検討するところから始めた。その検討の中で、目標を達成するために行っている題材や各段階の目標の違いを記録し、シラバ

スを検討しながら、学習指導要領の内容で取り組めていない内容がないかの確認と、児童生徒の各教科等の段階を判断するチェック項目の検討も行うこととした（表1）。

今後は、シラバスの検討を継続しながら、検討が済んだ内容から次年度の各教科等の年間指導計画の作成時に活用していき、学習の積み上げが明確な系統性のある学習計画が実施できるようにしていきたい。

表1 シラバス（国語科）の検討途中の資料（一部）

国語		小学部			中学部		高等部	
学部	教科の目標（学習指導要領）							
	言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で理解し表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。			言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で理解し表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。		言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で理解し表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。		
知識及び技能	(1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し使うことができるようにする。			(1) 日常生活や社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。		(1) 社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。		
思考力、判断力、表現力等	(2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け、思考力や想像力を養う。			(2) 日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。		(2) 社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。		
学びに向かう力、人間性等	(3) 言葉で伝え合うよさを感じるとともに、言語感覚を養い、国語を大切にその能力の向上を図る態度を養う。			(3) 言葉がもつよさに気付くとともに、言語感覚を養い、国語を大切にその能力の向上を図る態度を養う。		(3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語を大切にその能力の向上を図る態度を養う。		
段階の目標	1段階	2段階	3段階	1段階	2段階	1段階	2段階	
知識及び技能	ア 日常生活に必要な身近な言葉が分かり使うようになるとともに、いろいろな言葉や我が国の言語文化に触れることができるようになるようにする。	ア 日常生活に必要な身近な言葉に身に付けるとともに、いろいろな言葉や我が国の言語文化に触れることができるようになるようにする。	ア 日常生活に必要な国語の知識や技能に身に付けるとともに、我が国の言語文化に触れ、親しむことができるようになる。	ア 日常生活や社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しむことができるようになる。	ア 日常生活や社会生活や職業生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しむことができるようになる。	ア 社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しむことができるようになる。	ア 社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようになるようにする。	
思考力、判断力、表現力等	イ 言葉をイメージしたり、言葉による関わりを受け止めたりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合い、自分の思いをもつことができるようにする。	イ 言葉が表す事柄を想起したり受け止めたりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合い、自分の思いをもつことができるようになる。	イ 出来事の流れを思い出す力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け、思い付いたり考えたりすることができるようにする。	イ 順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもつことができるようになる。	イ 筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようになる。	イ 筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようになる。	イ 筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げることができるようにする。	
教科の目標（本校版）								
段階の目標	1段階	2段階	3段階	1段階	2段階	1段階	2段階	
知識及び技能								
思考力、判断力、表現力等								
A 聞くこと・話すこと								
段階チェック項目								
経験から考えられる題材	小学部							
	中学部							
	高等部							

### 3. 研究大会報告

令和4年12月26日にオンラインで研究大会（1年次）を実施した。全国から47名の先生方に参加していただいた。本校からの基調提案に対する指導助言を本学特別支援教育部門の今枝史雄先生からいただいた。研究大会の最後は、文部科学省 初等中等教育局 特別支援教育課 特別支援教育調査官 加藤宏昭先生から「知的障害特別支援学校における教育課程に基づいた指導と評価の一体化に向けて」と題するご講演を賜った。大会後のアンケートでは、感想や質問を多数いただき、次年度の研究につながる大会となった（写真2）。

### 4. 引用・参考文献

文部科学省中央教育審議会 2019 児童生徒の学習評価の在り方について（報告）

文部科学省中央教育審議会 2021 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、共同的な学びの実現～（答申）

文部科学省中央教育審議会 2019 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）

文部科学省 2021 学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料



写真2 令和4年度 研究大会（1年次）の様子

表2 「学習指導案の見直し チェック表（令和4年度版）」

1	単元の目標		3観点での目標が設定されている	1
			「知識及び技能」を活用した「思考力、判断力、表現力等」の目標になっている	2
			「思考力、判断力、表現力等」の1つの目標の中にこの3つの内容がある	3
			目標の数が絞られている	4
			「学びに向かう力、人間性等」が態度目標として書かれている ・「自ら」＝自発的、自主的、主体的・・・ ・「他者に～しようとする」＝よいところ、発表する・伝え合う ・「参加しようとする」＝授業、学校生活、地域生活、社会生活 ・「粘り強く・集中して」＝課題に対する取り組み方	5
2	単元設定の理由	児童生徒観	児童生徒の各教科等の段階が書かれている	6
			学習グループの構成（学年、人数）が書かれている	7
			単元目標に関する児童生徒の実態（習得内容・課題・特性など）が書かれている	8
	教材観	学習指導要領での位置づけが書かれている	9	
		今までの学習とのつながりが書かれている	10	
		単元目標達成のためにこの教材を選んで理由が書かれている	11	
		他教科や行事とのつながりが書かれている	※必須ではない 12	
	指導観	全体への指導・支援についての指導観が書かれている	13	
		個別の指導・支援については代表的なものが必要に応じて書かれている	14	
		単元目標達成のために必要な指導や支援の方法が書かれている	15	
3	単元の評価規準		単元目標と一致している	16
			パフォーマンス評価（行動評価）になっている	17
			「～しているか・～していたか」と書かれている	18
4	単元の指導と評価の計画		「知識及び技能」→「思考力、判断力、表現力等」→「学びに向かう力、人間性等」の流れで計画している	19
5	本時の目標と評価規準		本時の目標・評価規準が具体的に書かれている	20
			目標と評価規準が一致している	21
6	本時の展開		「●全体支援」は「指導観」と一致している	22
			評価規準の欄に評価方法が書かれている	23
			「●全体支援」と「☆個別支援」は個別的教育支援計画の「合理的配慮」を参考にして書かれている	24
			「☆個別支援」は個別の指導計画の「指導・支援の内容」を参考に書かれている	25

小学部 「生活科 3くみ」学習指導案

指導者 ○○ ○○ (T1) ○○ ○○ (T2)

指導教員 ○○ ○○

1. 日時 令和 年 月 日（曜日） ○○:○○ ~ ○○:○○

2. 場所 小学部3組

学習内容がイメージしやすい題名

3. 対象 小学部 5年生2名 6年生3名 計5名

4. 単元（題材）名 「 おもいとかるい（ものの仕組みと働き）」

学習指導要領の内容

5. 単元（題材）の目標

	目 標	知識 及び 技能	思考力・ 判断力・ 表現力等	学びに 向かう力、 人間性等
①	重い、軽いがわかる。	○		
②	重さの働きに気づき、感じたことや考えたことを表現することができるようにする。		○	
③	比較、予想、確認といった活動を通じて、重さの働きについて意欲的に学び、生活に生かそうとする。			○

年間指導計画に基づいて3観点で設定する。

6. 単元（題材）設定の理由

(1) 児童・生徒観

本グループは1段階から3段階までの小学部5、6年生5名の児童からなる。児童たちが学校生活の中で体験する「重さ」には、通学カバン、机や椅子運びなどがある。5人とも高学年になり体もしっかりしてきており、学習机程度であれば一人で運べるが、それ以上の重さのものになると持つ手を離し、そのままにしてしまう。しかし作業台など重いものを運ぶ時に促されれば協力して運ぶことができる。生活科において、**ア基本的な生活習慣、イ安全（重く危険なものに近づかない）、キ手伝い・仕事（協力する）**において関連した学習を行っている。

・グループの段階  
・単元目標に関する実態

本教科での類似の学習実態があれば書く。

(2) 教材観

本単元は、特別支援学校小学部学習指導要領における生活科（シ）ものの仕組みと働きに関わる活動をふまえて設定した。重さは見えないのでその働きに関心を持ちにくい、日常生活においては関わりの深いものである。本単元を通じて生活に関わる様々なものの重さやその働きに気づき、自分なりの考えを持ち表現していくことをめざす。また学んだことを日常生活で活かせるよう、一人では重くて運べないものを運ぶという場面を設定し、問題の解決に向け、自ら考え行動しようとする態度を養いたい。具体的には対象を分割して運ぶ、助けを呼んで協力して運ぶ、道具を使って運ぶといった行動につながることを期待する。またこの内容は中学部理科につながるものである。

・学習指導要領のどの内容化を示す。  
・この単元を取り上げた理由を示す（単元を学ぶことを通じて日常生活や社会参加に必要な力にどのようにつなげたいのか）

(3) 指導観

1次では2つの異なる重さのものを持つ（受け取る）活動を行う。最初は軽いもの、次に重いものを持つことで、重さの違いに気づき、「重い・軽い」といった語彙ともつなげる。さらに2つのものを持ち比べる活動を通して、量や大きさと重さの関係を感覚的に体験できるようにする。  
2次では2つのものの重い軽いを理由をつけて予測し、持ち比べや天秤などの道具を使って確かめる活動を行う。ここでは特に「多いから重い、大きいから重い」など、量や大きさと重さの関係をことばを使ってより概念的に捉えられるようにする。  
3次では重いものをどうやって運んだらいいかを考える活動を行う。2次で学んだ「多いと重い」から「少ないと軽い」に気づけるようにするため、重さを分割できるもの（2L×9本=18kgのペットボトルケース）を使う。また協力や道具の使用への気づきは、普段の生活体験を振り返りながら考えられるようにする。

単元目標を達成するために、どのような活動を、どのような方法で指導するのかを書く（「8指導と評価の計画」と対応させるとわかりやすい

指導案説明用（実習生用） 2022年度版（別紙1）

7. 単元（題材）の評価規準

評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・2つのものを持ち比べ、「重い方をください」「軽い方をください」という言葉かけに <u>正しく応じることができる</u> 。	○		
・2つのものを見比べ、重いと思う方を <u>理由とともに伝えている</u> 。（てんびんの下がった方、量の多い方など） ・一度には重くて運べないものを <u>工夫して運ぼうとしている</u> 。（量の調整や援助を求める行動、道具の使用など）		○	
・重さを比較したり予想したりする活動に <u>参加しようとしている</u> 。 ・重さについて学んだことを日常生活に <u>生かそうとしている</u> 。			○

「5単元（題材）の目標」と対応していること  
パフォーマンス評価（行動評価）で書くこと

「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、授業中以外の時間も評価対象になる。これが教科横断的な力となる。

8. 単元（題材）の指導と評価の計画（全8時間・本時は第3時）

次	時間	学習内容	主な評価規準【観点】
1	2	2つのものを持ち比べ、重い軽いを理解する。	・2つのものを持ち比べ、「重い方をください」「軽い方をください」という言葉かけに <u>正しく応じることができる</u> 。【知識・技能】 ・重さを比較する活動に <u>参加しようとしている</u> 。 【主体的に学習に取り組む態度】
2	2	・2つのものを見比べ、重い軽いを予想する。 ・道具を使って重さの違いを確かめる	・2つのものを見比べ、重いと思う方を <u>理由とともに伝えている</u> 。 【思考・判断・表現】 ・予想したことを、持ち比べたり天秤を使ったりして <u>確かめようとしている</u> 。【思考・判断・表現】 ・軽重を予想したり確かめたりする活動に <u>参加しようとしている</u> 。 【主体的に学習に取り組む態度】
3	3	・日常生活における重さの働きの気づき、解決方法を考える。	・一度には重くて運べないものを <u>工夫して運ぼうとしている</u> 。（量の調整、援助を求める行動、協力、道具を使うなど） 【思考・判断・表現】 ・重さについて学んだことを日常生活に <u>生かそうとしている</u> 。 【主体的に学習に取り組む態度】

「7単元（題材）の評価規準」と対応していること  
パフォーマンス評価（行動評価）で書くこと

9. 本時の目標と評価規準

本時の目標
・重さの違いに気づき、感じたことや考えたことを表現することができるようにする。
評価規準
・2つのものを <u>比較し</u> 、重いと思う方を <u>理由とともに伝えている</u> 。【思考・判断・表現】
・予想したことを、持ち比べたり天秤を使って <u>確かめようとしている</u> 。【思考・判断・表現】
・軽重を予想したり確かめたりする活動に <u>参加しようとしている</u> 。【主体的に学習に取り組む態度】

指導案説明用（実習生用） 2022年度版（別紙1）

10. 本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点 ●全体支援 ☆個別支援	評価規準 (評価方法)
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつ</li> <li>・前回をふりかえり、ものには重さ(重い軽い)があることを思い出す。</li> <li>・本日のめあてを確認する。</li> </ul> <p>どちらがおもいかな？よそうして(かんがえて)みよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●言葉と感覚(実物)両方で確認する。</li> </ul>	
展開 20分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ABC 2つのものを見比べ、どちらが重いか予想する。</li> <li>A: 500mlと1Lのペットボトル</li> <li>B: 1本のペットボトルと3本のペットボトル</li> <li>C: 消しゴム1個と消しゴム3個</li> </ul> <p>どうしてそうおもったのかな？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・重いと思う方とその理由を発表する。</li> <li>期待する反応「大きい、多い、たくさんだから」</li> </ul> <p>どちらがおもいか、たしかめてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に持ち比べて確かめる。</li> <li>・消しゴムは、天秤を使って確かめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●比較対象は写真で提示し、重いと思う方を指でさせるようにする。</li> <li>●理由が出にくい場合は、「多い」「少ない」「まるい」「かたい」「はやい」などの単語カードをヒントに提示する。</li> <li>●予想と結果を黒板に記録する。</li> <li>●天秤は重い方が下がる道具であることを最初に確認する。</li> </ul> <p>☆児童 AB は発表された予想と結果をマグネットを使って黒板に記録する。(12準備物参照)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2つのものを比較し、重いと思う方を理由とともに伝えている。</li> <li>【思考・判断・表現】(行動観察)</li> <li>・軽重を予想したり確かめたりする活動に参加しようとしている。</li> <li>【主体的に学習に取り組む態度】(行動観察)</li> </ul>
まとめ 10分	<p>今日のまとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・たくさんあると重さはどうなるのかを考える。</li> <li>・「どちらがおもい？」のワークプリントをする。</li> <li>・次回の予告とおわりのあいさつ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●「ものはたくさんあると重くなる」ことを確認する</li> <li>☆児童 CD は発展的に「どちらが軽い」についても考える。</li> </ul>	

●全体支援と☆個別支援に分けて書く。☆が個別の指導計画にあたる。

「9本時の目標」に対する評価規準のみ記入

観点

評価の方法

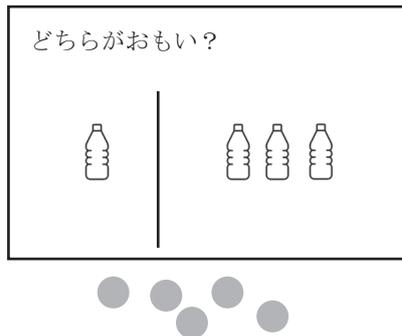
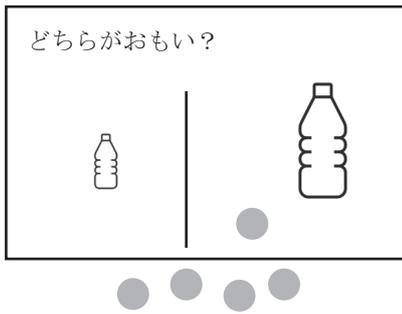
指導案説明用（実習生用） 2022年度版（別紙1）

11. ふりかえり（授業後に記入）

本時の評価規準（概ね達成できていれば☑をいれる）	
☐ 2つのものを比較し、重いと思う方を理由とともに伝えている。（てんびんの下がった方、量の多い方など）	
【思考・判断・表現】	
☐ 軽重を予想したり確かめたりする活動に参加しようとしている。【主体的に取り組む態度】	
児童生徒の様子と次回に向けて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・良かった点</li> <li>・改善点</li> </ul>

ふりかえりは「評価規準」をもとに行う。児童生徒が本時の目標を達成できたのかどうか。達成できたのであれば何が良かったか。できなかったら何が課題と考えられるか、など。

12. 準備物（配布資料は別途添付）



13. 配置図

14. ご高評価欄